

KAMISHIMA BOOK

# 神島読本

自然と静けさが

織りなす

特別な島時間を。

静かな海と壮大な自然、

そして人の温もり。

島の道を歩きながら、景色に

立ち止まり、風に耳を澄ませる。

そんな時間が、きっとあなたの

心を整えてくれます。

あなたの島時間が、

ここで特別なものになることを

お約束します。

## 目次

1. 神島マップ
2. 神島での過ごし方
3. 三島由紀夫特集
4. 島民インタビュー



● 監的哨跡

● カルスト地形

ニワの浜

八代神社

神島小学校・中学校

寺田さん宅

● 八畳岩

洗濯場

時計台

山海荘

古里の浜

● 神島漁港

三重県鳥羽市神島町  
面積：0.76km<sup>2</sup>  
周囲：3.9km  
標高：171m  
人口：290人  
(2020年国勢調査)

# アクセス

市営定期船（神島⇄鳥羽） 運賃：片道740円  
 ※2026年4月1日時点 子どもは370円

神島行		
佐田浜 (鳥羽マリンターミナル)	和具	神島
7:40	8:00	8:20
10:40	11:00	11:20
14:30	—	15:00
◎ 17:00	—	17:30
● 17:30	—	18:00

鳥羽行		
神島	菅島	佐田浜 (鳥羽マリンターミナル)
6:50	7:15	7:28
8:35	9:00	9:13
11:35	—	12:00
15:10	—	15:40
◎ 17:35	—	18:05
● 18:05	—	18:35

◎ 冬期ダイヤ（10月16日から2月末日）

● 夏期ダイヤ（3月1日から10月15日）

※荒天等により、ダイヤが変更される場合があります。

## 所要時間

### ゆっくり1周：2時間

- 市営定期船のりば→八代神社：10分
- 八代神社→神島灯台：10分
- 神島灯台→監的哨跡：15分
- 監的哨跡→ニワの浜：15分
- ニワの浜→市営定期船のりば：25分



## 旅のしおり

## 神島で過ごす、心をほどく二日間

Day 1  喧騒から離れた島自然の宝庫・神島を歩く

旅の1日目は、八代神社から始まります。神島灯台や監的哨跡を巡り、島の自然が生み出したカルスト地形が広がる浜へ。海風や波音を感じながら、島を一周する徒歩の旅。夕方は夕日が見える浜で日没を静かに見届け、夜は神島の漁師さんが採った新鮮な魚を山海荘で味わいます。自然と向き合う時間が、心をゆっくりと整えてくれます。

10:40



## 佐田浜(鳥羽マリンターミナル)発

ミジュマル公園が隣接する鳥羽マリンターミナルの船乗り場から神島に向かいます。

11:20 - 12:30



## 神島到着&amp;神島散策

神が宿る海の島神島に到着。潮騒公園や大量の蛸壺置き場を探しながら乗船場付近を散策しましょう。

13:00



## 昼食：「山海荘」にて

「山海荘」で昼食をとります。その日仕入れた食材を使った新鮮な魚料理をお楽しみ頂けます。※宿泊・食事は要予約 ☎ 0599-38-2032

14:00



## 八代神社

神島唯一の神社。214段の階段がお出迎えしてくれます。参拝後は島の小学生手作りの「こどもおみくじ」で運試し。

14:30



## 神島灯台

神島灯台は、白亜の灯台と青い海が美しい景観をつくり出す、島のシンボルです。「恋人の聖地」に認定されています。

15:00



## 監的哨跡

戦時中に旧陸軍が伊良湖水道から撃つ大砲の着弾を目視して確認するための施設。高台からは伊勢湾を一望でき、雄大な海景色が楽しめます。富士山が見えるかも…?

16:00



## ニワの浜

石灰岩が長い年月をかけて風雨に削られて生まれたカルスト地形が広がっています。白い岩肌と海の青が織りなす独特の景観は、島ならではの自然美を感じさせます。

16:30

※季節によって時間が変わります



## 古里の浜で夕日鑑賞

水平線に沈む夕日が海と空を茜色に染め、静かで幻想的な時間を味わえます。

18:00

## 山海荘で海の幸を楽しむ

地元の漁師さんがその日に採ってきた新鮮な海の幸を味わえます。島ならではの贅沢な味が、旅の一日をやさしく締めくくります。



八代神社



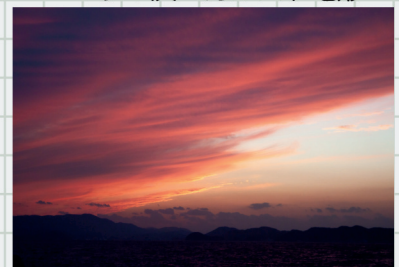
神島灯台



監的哨跡



ニワの浜・カルスト地形



夕日

## Day 2 島の暮らしと歴史に出会う1日

2日目は、水平線から昇る朝日を眺めることから始まります。神島名物の神塩を作る小屋を見学し、自然の恵みを活かした島の暮らしに触れた後、漁港で活気あふれる朝の競りを見学。最後は、三島由紀夫が滞在した寺田家を訪れ、神島に息づく歴史と文化を感じる時間を過ごします。

7:00  
※季節によって時間が変わります



### 朝日鑑賞

水平線から昇る朝日が静かな海と空を照らします。島の1日の始まりを感じられます。



朝日

8:00



### 朝ごはん

9:30



### 神島の塩小屋見学

海水と自然の力を活かして作られる神島名物の神島の塩。島の暮らしに根づく製塩の知恵を見学できます。

※要予約  @katsuakiterada



神塩小屋

10:40



### 漁港見学

※作業の妨げにならないよう周囲へのご配慮をお願いいたします。  
朝の漁港では、その日に水揚げされた魚や、伊勢海老の競りが行われます。島の活気ある日常を間近で感じられます。



漁港

12:00




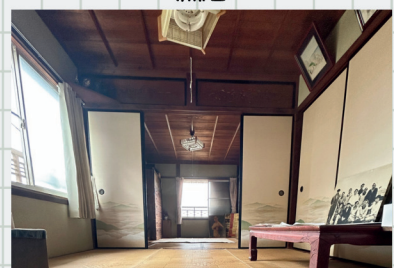
### 昼ごはん

13:30



### 三島由紀夫が滞在した寺田さん宅見学

作家・三島由紀夫が滞在した家を訪れ、神島と文学のつながりをたどります。※要予約  @katsuakiterada



寺田さん宅

14:00 - 15:00



### 自由時間

神島での旅の締めくくりは、お気に入りの場所でのんびりと。海を眺めたり、島内を歩いたりしながら、島で過ごした時間をゆっくり振り返ってみてはいかがでしょうか。

15:10

### 神島港から佐田浜へ

遠ざかる島影を眺めながら、静かで特別な時間に別れを告げましょう。



#### 1.神島では時計が必要ない！？

→神島では船の到着時間に合わせて島内放送が流れる。島民の方々はこの放送から時間を把握しているようだ。

#### 2.神島にはスーパーマーケットやコンビニがない！？

→島の漁協でのみお買い物が可能。しかし休日は営業しておらず調味料や飲料など生活必需品のみの販売。要注意。

#### 3.神島では獣害の心配がない！？

→神島には猪や熊といった獣が未上陸。しかし、神島に迷い込んだ猫が2匹ほど確認されている。

※神塩小屋と三島由紀夫が滞在した寺田さん宅見学については、山海荘にご宿泊またはお食事をご利用の方限定となっております。ご予約は寺田さんまで。

## 旅のしおり

旅の途中に、島の休符

## Day-trip 島時間を少しだけ、神島ショートステイ

真珠島や鳥羽水族館の前後に立ち寄れる、神島の日帰りショートステイ。滞在時間に合わせて、2つの過ごし方をご用意しています。



## 神島ぐるり一周散歩 2時間滞在コース

2時間コースでは、徒歩で島を一周しながら神島の自然と風景を楽しみます。海を望む道や山道を歩き、島の空気を全身で感じる時間。少し歩くからこそ出会える景色が、旅の印象を深めてくれます。

7:40	佐田浜(鳥羽マリンターミナル)発
8:20	神島港到着
9:00	八代神社 こどもおみくじ
9:30	神島灯台 渥美半島を見渡すビューポイント
10:00	監的哨跡 ビューポイント
10:30	ニワの浜 カルスト地形
11:35	神島港から佐田浜へ



神島港



こどもおみくじ



## つながらない時間を楽しむ 3時間滞在コース

チルスポットを巡りながら過ごすデジタルデトックスの旅。スマートフォンをしまい、海や風、島の静けさに身をゆだねながら、何もしない時間を楽しみます。日常から少し離れ、心を整える島時間をゆっくりと味わえます。

14:00	佐田浜(鳥羽マリンターミナル)発
15:00	神島港到着 神島到着とともにスマートフォンの電源をオフに！ デジタルデトックスの旅を始めよう！
15:40	監的哨跡 チルスポット①
16:10	ニワの浜 チルスポット②
16:50	古里の浜 チルスポット③
17:35	神島港から佐田浜へ



監的哨跡



古里の浜

※冬期ダイヤ  
(夏期は18:05発)

## ⚠️ 食事は要持参 ⚠️

→神島には食事を摂れる場所がない。山海荘では日帰り観光客もお食事ができるが、**事前予約必須**

1.八代神社でこどもおみくじを引いてみよう！

→八代神社では島の子どもたちが作ったおみくじが置かれている。運試ししてみよう

2.動きやすい服装で行こう！

→島内散策は徒歩が中心、動きやすい服装で



# 神島・チルスポット特集

神島の癒されスポットをご紹介します



(2階からの写真はP.6に掲載)

## チルスポット① 監的哨跡からの眺め

本来この監的哨跡は、戦前に旧陸軍が伊良湖岬側から撃つ大砲の着弾地点を目視するための施設で、『潮騒』では重要なシーンとして使われている。木漏れ日さす森の中を歩いてゆくと現れるその姿は、深い歴史の風情漂う、不思議な貫禄を纏っている。2階部分には四角い窓があり、まるで海をそのまま切り取った絵画のようだ。さらに屋上へ向かうと、空と海が私たちを包み込み、その青い美しさに心が浄化される。特に晴れた日は格別。

限りなく空に近い場所で、ひとつ、深呼吸を。

## チルスポット② ニワの浜の東屋

カルスト地形で有名なニワの浜。島を一周してほどよく疲れた頃に、たどり着く。浜の近くに佇む小さな東屋で、ちょっとひと休みしてはどうだろう。耳を澄ませば波の音が押し寄せ、心地よい風が頬をそっと撫でてゆく。

自然が奏でる音楽に、目を閉じて感じよう。



## チルスポット③ 古里の浜の夕日

古里の浜から見える熟れた夕日は、ありふれた一日の終わりに彩りを与えてくれる。夕日を反射した海面は鏡のように眩しく光り、太陽が沈む姿をただぼんやりと眺める時間は、ゆるやかな時の流れを体感できる。

夕日に染まった砂浜で、からだ中で海を感じてみる。



夕暮れの浜辺で読書タイム。  
※休憩にはレジャーシートがあれば便利。

# 』を片手に巡る。



3



1



2



4



5

船を降りてすぐに出迎えてくれるのが、神島が三島由紀夫『潮騒』の舞台であることを伝える潮騒公園(①)である。一九五三年(昭和二十八年)、三島は小説執筆のため神島を訪れ、約一か月間滞在した。『潮騒』を片手に、三島が見た景色をたどりながら島を歩いてみよう。

潮騒公園から左へ進むと、小さな船がいくつも並ぶ船揚場(②)が、海から陸へなだらかに続いている。ここは新治と初江が初めて出会った場所であり、映画のロケ地となった。

三島が物語の冒頭で「眺めのもっとも美しい場所」と綴った場所が二つあり、その一つが八代神社(③)である。二百四段の石段には心が折れそうになるが、ふと足を止めて振り返ると、その美しい景色(④)が広がっている。三島が見た当時より木々は多いものの、島の家々と果てしなく続く水平線は圧巻だ。広い海の中にぼつんと佇む島に立っていることを、強く実感させられる。

もう一つの「眺めのもっとも美しい場所」が神島灯台(⑤)である。灯台へ向かう途中、表札の少し手前には、かつて建物があったことを思わせる場所が残されている。新治が魚を届けていた灯台長の家があったとされる場所だ。灯台は物語のラストシーンの舞台でもあり、「恋人の聖地」と記されたプレートも設置されている。灯台の前からは海を一望でき、行き交うさまざまな船をいつまでも眺めていたくなる。そして伊良湖岬がすぐそこに見える。

# 三島由紀夫『潮騒』



さらに山道を進むと、監的哨跡(6)が姿を現す。嵐の夜、新治と初江が互いの想いを確かめ合った場所である。無機質な建物にはどこか緊張感が漂うが、目の前に広がる青い海と、その音に意識が引き寄せられる。屋上から見下ろせば、はるか下に岩場が連なり、正面にはどこまでも続く海が広がっている(7)。

そこから少し山を下ると、カルスト地形が美しくそびえ立つニワの浜(8)に出る。島のほかの浜でも海女の姿は見られるが、映画に登場する海女のシーンはここで撮影された。運が良ければ、実際に海女が潜る様子を目にすることができるとは思えない。東屋の脇から木々に囲まれた小道を進むと、その先に現れるのが古里の浜である。静かな浜辺に、波の音だけが響き渡る。

そして集落の中には、かつて使われていた洗濯場(9)が残されている。今も水が流れており、その名残を感じることができる。その少し上に建つのが、三島由紀夫が滞在していた民家(10)だ。三島は二階の部屋で暮らし、よく海をぼんやりと眺めていたという。中に入ることにはできないが、三島が歩いた道や、島での生活に思いを巡らせることができる場所である。

神島ならではの、ゆったりとした時間の流れ、海の近さを常に感じさせる波の音、そして島の人たちのあたたかさ。三島由紀夫が過ごした先で、描いた世界に足をそっと踏み入れた先で、あなたは何を感じるだろうか。



# 島民インタビュー

～島の声に思いを寄せて～



てらだ かつあき  
**寺田勝昭さん**

島で「神島の塩」を作りながら  
島の誘い人として神島を発信中！  
「何も無い」がある島へ、  
ようこそ

- ・ 寺田さんが思う神島の魅力とは？  
：自然や食べ物はあるような場所にもありませんが、調べれば調べるほどに神島の歴史は深く「始まりの島」とも言われている点、ですかね。島ならではの祭りなどもあり、神秘的で特別な場所だという自負はあります。
- ・ 神島の中で一番お気に入りの場所は？  
：古里の浜。特にそこで見える夕日が格別で、一日の終わりを感じさせます。他にも、船場など自分のじいさんが働いていた場所を見ると、どこか幸せを感じ、いち個人としては思い入れが深いですね。
- ・ 神島で塩作りを始めた理由は？  
：塩を作れたかったわけではないんです。神島がこんなに魅力的なのに、このまま埋もれていくのは嫌だと思っていて、何か商売できないかと思った時に、お世話になった社長さんから塩づくりを提案していただき、始めたんです。作っているのと、この島は海水まで透き通っていることも分かったり…。神島を発信する一つのツールとして塩を作っているという感じです。
- ・ 今後、神島がどんな島になってほしいですか？  
：徹底抗戦の現状維持！今後、発展していくとは考えにくく、どんどん衰退してしまうことはどうしようもない。だから、僕も含め島民が、他所から来る人を



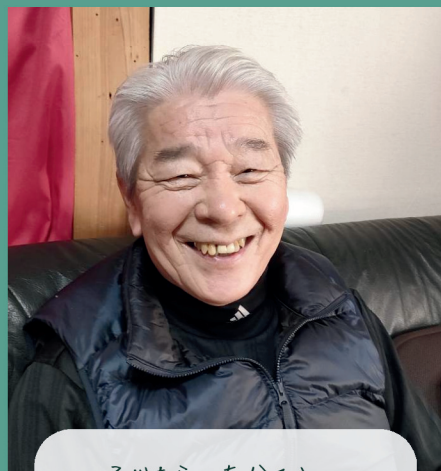
夕日に満ちた  
古里の浜で  
流木を収集。



島の案内をする  
寺田さん。

受け入れていく覚悟を持たないと維持は出来ないと思う。ただ、島のことを理解してくれる人が来て、彼らの意見も含め、皆で島をつくっていったら良いなと思っています。

神島町内会長です！  
心が疲れたら、  
神島へいらっしゃい。



ふじわら たかひと  
藤原隆仁さん



島を案内中の  
藤原さん♪

・神島でお気に入りの場所は？

…全部ですね（笑）。島を一周できるコースは町内会で管理して、枝を切ったり、雑草を除去したりと、協力して景観を保っています。一部、職人さんをお願いして、今は神島灯台から海を一望できるようにになりました。神島は、観光客を惹きつけるための施設は一つないけれど、だからこそ手の入っていない空気感が残っていて、都会の日常からは解放された場所です。

・今後、どんな神島になってほしいですか？

…かつて三島由紀夫がこの島を訪れた後、雑誌に寄稿した文章の中にも、この先も神島の素朴な自然の美しさが失われてほしくないと言書かれています。それに尽きません。生活は便利になってほしい反面、開発ばかりされて自然が失われるのは嫌ですね。



## 海女さんくらむ

こちらは、藤原さん宅にあった海女さんTシャツの  
右下の2つの印に注目！これらはそれぞれ、  
星形の印（セーマン）と格子状の印（ドーマン）という  
海女たちが危険から身を守るためのまじないである。  
セーマンは安倍晴明、ドーマンは芦屋道満の名に  
由来するといわれている。

とは言っても、カフェなど少しでも皆が休憩したり、集まることのできる場所があれば良いなと思っています。  
一杯飲める場所とかも（笑）それに、どんどん人口が減ってしまい、子どもが減ると島の雰囲気も暗くなってしまう。今、島を離れている人たちが帰ってきて、漁業以外の収益の見込める仕事があれば良いなとも思っています。でも、変化のハードルは、高いです。



神島生まれ、神島育ちの  
夏には海女として  
海にも潜ります！



こくぼ まつよ  
小久保まつ代さん

・海女さんの仕事内容は？

・まつ代さんが思う神島の魅力とは？  
…のんびりしたところ。何も考えなくて良い自由な空間ですね。信号もないし、…、なんだか時間の制約がない場所です。漁師さんが市場へ捕れた魚を持っていくときも、誰も焦っていない、そんなゆったりした時間が一番の魅力ですね。

・ふだんは島でどんなお仕事をしていますか？

…もともと神島育ちで、1年漁協に勤めていましたが、神島で結婚し、しばらくは子育てに専念していました。子供が高校に上がったタイミングで、島の宅急便を届ける仕事を始めました。船の便も少なく、島の人の住む家も把握しているのが、業者さんよりもすぐに届けることができます。他にも、月に数回、黒海苔の選別や、イセエビ漁の網掃除。夏には海女として海に潜っています。

・昔から潜ることができたのですか？

…小さい時から、夏休みになると海で泳いでいました。船着き場でもあったので、船が来たらいりたり、乗ったりしていました。なので、幼いころから、海には慣れていましたね。（編集・矢野花歩）

## あとかき

神島に辿り着いて、私たちはいくつもの“声”を聴いた。  
それは海、風、木々、そして神島に暮らす人々の“声”である。  
この島の外からやって来た私たちを、島のみなさんは受け入れてくれるだろうか。  
心にわずかな不安を抱えたまま、このプロジェクトは始まった。

「神島の魅力は何ですか？」

◆ 余白のある時間、手の付けられていない自然…、  
島のみなさんは、それぞれの笑顔で私たちにそう語り掛けてくれた。 ◆

◆ 「神島の魅力は何ですか？」 ◆

◆ 私たちの答えは、明らかだった。それは、いつだって私たちに向けられた、  
島のみなさんの“やさしさ”だ。 ◆

言葉にできない景色、新鮮なお刺身、島のゆるやかな時の流れ。  
魅力を挙げればキリがないけれど、それらすべてを私たちにプレゼントしてくれたのは、  
みなさんの“やさしさ”だったことに、ふと気が付く。

そんな神島のあらゆる“声”を、この一冊に詰め込んだ。  
これがせめてもの、島のみなさんへの贈り物になればいい。

そして、これから神島に出逢う、あなたへの。